

日本女性放射線腫瘍医の会 学会助成事業 報告書

2019年1月16日

京都大学大学院 医学研究科 放射線腫瘍学・画像応用治療学講座 大学院生
小野幸果

日本女性放射線腫瘍医の会（JAWRO）学会助成事業に採択いただき、2018年12月7日から9日までシンガポールにて開催されました『第1回 ESTRO Meets Asia』に参加しましたので、ご報告をさせていただきます。

ESTROは、ヨーロッパの放射線腫瘍学会で、今年で学術集会が38回目を迎え、ESTRO schoolなど様々な分野のセミナーが世界各国で開催されています。これまではヨーロッパでしか行われていなかったためややハードルが高かったのですが、今回アジアで記念すべき第1回目の開催となり、非常にアクセスしやすく、時差もほとんどないため魅力的でした。アジア人口は、世界人口74億人のうち、44億人と60%を占めているにも関わらず、放射線治療を必要とする人の多くが治療を受けられておらず、放射線治療の正しい知識を広めるのに非常に良い機会なのかもしれません。学会では臨床、放射線生物、医学物理、放射線技術の他、複数の専門分野による約300の演題（口演55、ポスター210）が発表されました。特にHERO(Health-Economics in Radiation Oncology)やGIRO(Global Impact of Radiotherapy in Oncology)のセッションは力が入っている印象を受けました。HEROに関しては、費用対効果や放射線治療による経済効果について多くの検討がなされていました。GIROに関しては『2035年までに100万人の命を救う』というキャッチフレーズで、救命とQOL改善、また経済格差が原因で放射線治療を受けられないということがないようにしようというミッションがあります。いずれにおいても、10年先、20年先の具体的な予測値や数値目標が設定されていました。昨今、新規薬剤が急速に使用されるようになってきているものの、医療費も膨大になってきており、数%の全生存率あるいは無病生存率を上げるのにこれだけの医療費を使ってどれほどのメリットがあるのか思うことが多々ありますし、費用対効果については今後ますます重要になってくると思います。普段なかなか見聞きすることのない分野でしたので、新鮮で色々考えさせられました。

私は現在、京都大学大学院生として乳癌における放射線治療を研究テーマとしており、乳癌についてHEROで経済効果の面からも着目されていた、寡分割照射など最近の動向を知ることができました。また、頭頸部癌や直腸癌など他分野についても海外のご高名な先生方による教育講演などがあり、大変有意義でした。今後の診療や研究へ生かしていきたいと存じます。

最後になりましたが、海外学会参加助成していただきましたことを、この場をおかりして、JAWROの皆様に深く御礼を申し上げます。誠にありがとうございました。